

特集：複他動詞構文 (Ditransitive construction) とその周辺に存在する問題点  
—Malchukov et al. (2010) の枠組みをもとにして—

趣旨説明

山田洋平  
(東京外国語大学大学院)

キーワード：複他動詞, 意味地図, 類型論

## 1. はじめに

この特集<sup>1</sup>は、複他動詞構文 (ditransitive construction) を類型論的に論じた Malchukov et al. (2010) をきっかけとして、各報告者がそれぞれ専門とする言語について見出した複他動詞構文とそれに関連する現象を論じるものである。

複他動詞構文とは、英語について学校文法でいう第四文型 (SVOO) のような、目的語項を二つ取る構文のことを指す。このような構文を取る代表的な複他動詞としては英語の give「与える」が挙げられるが、一般に「複他動詞構文」と言ってもどんな動詞が、どのような方法でこれを表すかは言語により様々である。様々な言語の類型を示すうえで複他動詞構文という研究分野はまだその創始の段階にあると言え、憂慮すべき問題は多岐にわたる。本特集が一種のたたき台として、今後の研究の進展に寄与すれば幸いである。

本稿は次節 2. において Malchukov et al. (2010) について紹介し、複他動詞構文についてその類型的諸特徴と、以降の個別報告で問題とする基本概念を導入する。なお例文に付された例文番号やグロス、和訳、下線は特に断りのない限り筆者による。

## 2. 複他動詞構文の諸特徴

以下では、Malchukov et al. (2010) の枠組みをもとに複他動詞構文の諸特徴を整理する。

2.1. では Malchukov et al. (2010) よりそもそも複他動詞構文とは何であるのか述べる。その上で、複他動詞構文の類型に関して考えるべき問題として 2.1. では格配列のパターン、2.2. では統語操作における振る舞いについて簡略にまとめる。Malchukov et al. (2010) はこうした諸特徴について様々な言語の例を挙げながら説明した後、複他動詞構文の個別言語での現れを意味地図で図示している。2.3. ではこの意味地図について概説する。

### 2.1. 複他動詞構文とは

Malchukov et al. (2010: 1) は複他動詞構文を複他動詞、A 項 (Agent)、T 項 (Theme)、R 項

---

<sup>1</sup>この特集は、2016年6月26日に慶應義塾大学三田キャンパスにて日本言語学会第152回大会で行われた同名のワークショップに基づき再構成したものである。再構成にあたってはワークショップのコメントーターの風間伸次郎先生をはじめ、来場者の方々からの貴重なご意見ご質問を反映させていただいている。ここで各個別報告を代表して略式ながら皆様へ御礼申し上げたい。

(Recipient-like) からの構文であると定義している<sup>2</sup>。Malchukov et al. (2010) はこのような構文の述語となる典型的な複他動詞として「与える」を挙げている。

(1) 英語

*Mary gave John a pen.*

PN to\_give.PAST PN INDEF pen

メアリー (A) はジョン (R) にペン (T) をあげた。

Malchukov et al. (2010: 1)

(2) ドイツ語

*Ich gab dem Kind den Apfel.*

1SG.NOM to\_give.PAST DEF.N.DAT child DEF.M.ACC apple

私 (A) は子供 (R) にリンゴ (T) をあげた。

Malchukov et al. (2010: 3)

(3) 西グリーンランド語

*(Uma) Niisi aningaasa-nik tuni-vaa.*

(that.ERG) PN money-INS.PL to\_give-IND.3SG>3SG

彼 (A) はニーシ (R) にお金 (T) をあげた。

Fortescue (1984: 89)

(1) の英語ではいわゆる第四文型、すなわち目的語項を二つ取る (二重目的語) を取っている。他方 (2) のドイツ語では、R 項が与格を取ることによって T 項 (対格) と区別されている。(3) 西グリーンランド語では T 項が道具格で現れ、R 項は無標である。R 項の現れる形式に違いはあるが、いずれもここでは複他動詞構文として扱う。Malchukov et al. (2010) はほかに、lend「貸す」、hand「手渡す」、sell「売る」、return「返す」など動作主が対象を有性の受け手の所有権に移動させることを表す動詞が典型的な複他動詞構文を成すとしている。

なお、他動詞、A 項、O 項 (Object) からの言わば「普通の他動詞構文」(transitive construction) について、本特集では複他動詞構文と区別する意味合いで単他動詞構文 (monotransitive construction) と呼ぶ。

## 2.2. 格配列のパターン

他動詞構文における被動者 (P: patient) と複他動詞構文における直接目的語項 (T: theme) 及び間接目的語項 (R: recipient) がどのように対応するかで indirective タイプ (T=P≠R) や secundative タイプ (T≠P=R)、neutral タイプ (T=P=R)、tripartite タイプ (T≠P≠R) に分類できる。indirective タイプでは、単他動詞構文の P 項と複他動詞構文の T 項が同一の形式 (格や一致など) でマークされる。次のドイツ語の例では、(4) 「リンゴを食べた」の「リンゴを」と

<sup>2</sup> 項の意味役割に基づく定義に留まり、形式面での定義はされていない。これを表す言語表現が言語ごとに多様であり、類型論的に考察する上での限界が垣間見える。例えば (1) の英語の例に見るような二重目的語を取るかどうかを形式面の定義とする可能性もあるだろうが、本特集で扱われる言語の中にはこうした構文を取る言語が無い。Malchukov et al. (2010) では各言語において「与える」など典型的な複他動詞と言いうる語がどのような構文を取るかといった点から個別言語的に複他動詞構文を決定しているようである。本特集においても凡そこれに倣っている。

(2) 「子供にリンゴをあげた」の「リンゴを」が同じ対格で現れている (当該名詞句の定冠詞が対格形 (ACC) になっている)。

(4) ドイツ語 単他動詞の例

*Ich aß den Apfel.*

1SG.NOM to\_eat.PAST DEF.M.ACC apple

私はリンゴ (P) を食べた。

Malchukov et al. (2010: 3)

(2) [再掲]ドイツ語 複他動詞の例

*Ich gab dem Kind den Apfel.*

1SG.NOM to\_give.PAST DEF.N.DAT child DEF.M.ACC apple

私 (A) は子供 (R) にリンゴ (T) をあげた。

Malchukov et al. (2010: 3)

これに対し *secundative* タイプとは、単他動詞構文の P 項が複他動詞構文の R 項と同一の形式になるものを指す。次の西グリーンランド語の例では、(5) 「よそ者を殺した」の「よそ者を」と (3) 「ニーシにお金をあげた」の「ニーシに」が共に絶対格 (ゼロ) でマークされる。

(5) 西グリーンランド語 単他動詞の例

*Piita-p takurnartaq tuqup-paa?*

PN-ERG.SG stranger kill-INT.3SG>3SG

ピータ (A) はよそ者 (P) を殺したのか?

Fortescue (1984: 192)

(3) [再掲]西グリーンランド語 複他動詞の例

*(Uuma) Niisi aningaasa-nik tuni-vaa.*

(that.ERG) PN money-INS.PL to\_give-IND.3SG>3SG

彼 (A) はニーシ (R) にお金 (T) をあげた。

Fortescue (1984: 89)

これらの他に単他動詞構文の P 項と複他動詞構文の R 項 T 項が全て同じ形式でマークされる *neutral* タイプ (例えば英語ではいずれも対格で示される) や、全て異なる形式でマークされる *tripartite* タイプ (ただし稀) などがある。図示すると次のようである。

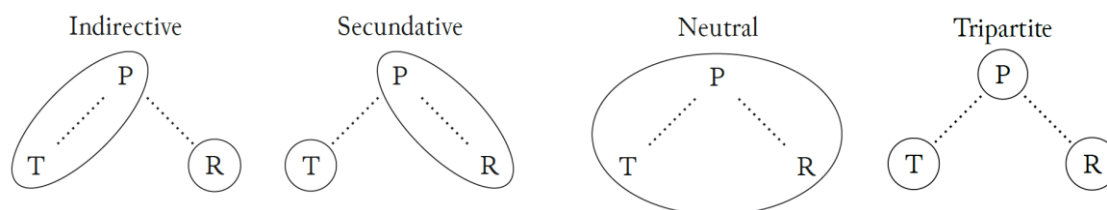


図 1: 複他動詞構文の配列図 (Malchukov et al. 2010: 5, 7)

Malchukov et al. (2010) ではさらに、それぞれの名詞項の標示の仕方が *flagging* なのか

indexing なのか言語によって異なることも問題にしている。flagging とは、配列が格や接置詞などによって名詞側に示されることであり、ここまで挙げてきた英語、ドイツ語、西グリーンランド語はいずれも flagging の仕組みを有している。

indexing とは、配列が一致によって動詞側に示されることであり、(3)(5)に見る西グリーンランド語でもこの仕組みが現れている(動詞接辞に見られる 3SG>3SG がこれを示している)。その他に(1)の例に見る英語のように、名詞側にも動詞側にも形式上示されず、語順によって配列が示される例もある。

### 2.3. 統語的操作における複他動詞構文の振る舞い

Malchukov et al. (2010: 25-) では統語的操作を行ったときに、複他動詞構文のどの項が他動詞構文の被動者と同じように振る舞うかを検討している。例えば indirective タイプの言語であっても、受動文に関しては主語に昇格させやすい項は単他動詞の P 項と複他動詞の R 項であるという。これは単他動詞構文を受動文にするときに昇格する項と、複他動詞構文を受動文にするときに昇格する項が同一である (P=R) ということであり、secundative タイプ的になりやすいと言える<sup>3</sup>。

#### (6) 英語 (能動態)

*They gave the sweets to the children.*

3PL to\_give.PAST DEF sweet.PL to DEF child.PL

彼ら (A) は子供ら (R) にお菓子 (T) をあげた。

Malchukov et al. (2010: 29) を変形

#### (7) 英語 (受動態)

a. *The children were given sweets.*

DEF child.PL to\_be.PAST.PL to\_give.PP sweet.PL

子供 (R) はお菓子 (T) を与えられた。

Malchukov et al. (2010: 29)

b. ? *The sweets were given children.*

DEF sweet.PL to\_be.PAST.PL to\_give.PP child.PL

お菓子 (T) は子供 (R) に与えられた。

Malchukov et al. (2010: 29)

他にも相互態や順行／逆行の操作も secundative タイプになりやすいという。

逆に、抱合や逆受動、さらに名詞化した際に属格で示される項 (Mary gave the book to the boy) に対して *Mary's gift of the book to the boy* / \**Mary's gift of the boy (of) the book* は、T 項由来の操作 (P=T) すなわち indirective タイプを取りやすいという。次の南ティワ語は複他動詞構文において Indirective タイプも secundative タイプも取りうる言語であるが、動詞が抱合できるのは T 項のみであるという。

<sup>3</sup> あくまで傾向であり、例えば例 (7) の和訳に見るように日本語では T/R いずれの項も受動文において昇格できる (neutral タイプである)。

(8) 南ティワ語

- a. *Ti-khwien-wia-ban*                      *seuanide-'ay*.  
1SG.3SG.R-dog-to\_give-PAST    man-to  
私は男に犬をあげた。                      Malchukov et al. (2010: 42 {Allen & Frantz 1983: 306f}<sup>4</sup>)
- b. *Ta-khwien-wia-ban*                      *seuanide*.  
1SG.3SG.R.3SG.T-dog-to\_give-PAST    man  
私は男に犬をあげた。                      Malchukov et al. (2010: 42 {Allen & Frantz 1983: 306f})

2.4. 複他動詞構文を取り得る動詞や標示の多様性と意味地図

典型的な複他動詞構文を取る動詞は閉じた体系を成すことが多く、「与える」を中心としてどのような動詞が複他動詞構文を成すのかは言語により様々である。さらに R 項の標示が他にどのような意味役割を担いうるかも言語ごとに異なる様相を見せる。Malchukov et al. (2010) はこれを意味地図上に示し類型論的な特徴を示そうとしている。これについて詳細は次の「複他動詞の意味地図」に譲る。

参考文献

- Fortescue, Michael D. (1984) *West Greenlandic*. London: Croom Helm.
- Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie (2010) Ditransitive constructions: a typological overview. In *Studies in Ditransitive Constructions A Comparative Handbook*. Berlin/New York: Walter de Gruyter GmbH & Co. KG

---

<sup>4</sup> Allen, Barbara J. & Frantz, Donald G. (1983) Advancements and verb agreement in southern Tiwa. In Perlmutter, David M. (ed.), *Studies in Relational Grammar*, Vol. 1, 303-316. Chicago: University of Chicago Press. 筆者未見

Some issues in Ditransitive construction: based on Malchukov et al. (2010)'s work

Yohei YAMADA

(Tokyo University of Foreign Studies)

This special issue is based on Malchukov et al. (2010)'s work, and each paper discusses an issue in ditransitive construction of a particular language. Malchukov et al. (2010) enumerate some features in ditransitive, such as case alignment and encoding strategies, and further present semantic maps on it.